

Re-member

木原活信

奨励者紹介〔きはら・かつのぶ〕

同志社大学副学長

同志社大学社会学部教授

弔いの家に行くのは
酒宴の家に行くのにまさる。
そこには人皆の終りがある。
命あるものよ、心せよ。
(コヘレトの言葉 7 章 2 節)

はじめに

このたび亡くなられた同志社にかかわる方々の地上での労苦を偲び、これに感謝するとともに、残されたご遺族のうえに神様の豊かな慰めがありますようにお祈りします。

さて、この追悼礼拝は、亡くなった人の成仏を願い、霊を慰めるためのいわゆる仏式の「法要」とは趣が異なります。この追悼式は、亡くなられた大切なお一人お一人の大切な在りし日を偲び、静かに思い起こし、それを記憶にとどめて記念し、追悼する場です。すなわち、そのことを通して、ご列席のご遺族、ご友人、関係者の方々の慰めとなると同時に、同志社に連なる一人一人がその悲しみに連帯するというものでもあります。そしてここに同席させていただいた全員が、死という現実と正面から向き合い、それを真摯に受け止めつつ、今生かされている者どもが故人を偲びつつ、意義深く生きるべきかを見つめ直すときでもあります。

「生涯の日を正しく数える」

先ほど、聖書朗読しましたように、詩篇 90 篇 12 節のなかで「生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることができるよう。」と書かれています。宗教改革者のマルチン・ルター(Martin Luther)はこの箇所を「私たちが必ず死ぬことについて熟慮するように教えよ」と解釈しました。

また、コヘレト 7 章 2 節では、「弔いの家に行くのは／酒宴の家に行くのにまさる。そこには人皆の終りがある。命あるものよ、心せよ。」とあります。これらの聖書が教えているのは、私たちの生には限りがあるということ、しかし、わたしたちは、時にそれを考えることを無意識のうちに避ける傾向にあるということに警鐘を鳴らしているようです。

一人称の死、二人称の死、三人称の死

ところで、死には人称によって「一人称の死」「二人称の死」「三人称の死」の3つに区分され、それぞれ人称によって、その受け止め方が違うと言われています。すなわち、「一人称の死」は「私」の死です。「二人称の死」は身近な「あなた」の死、つまり近親

者の死です。「三人称の死」は自分とは直接かかわっていない「他者」の死です。

その意味で、本日の追悼式を通して、「生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることが出来ますように。」(詩篇 90 篇 12 節)と示されているように、ここに集う者たち皆が「生涯の日を正しく数える」ことを謙虚に学び、そしてまた「人皆の終りがある。命あるものよ、心せよ。」(コヘレト 7 章 2 節)と警告されているように、死を他人事ではなく、「一人称の死」、つまり自らの死として受けとめて真剣に考える機会となりますように願っています。それであってもお生かされたものとして、一日一日を大切に生きることを教えているのだと思います。内村鑑三は「一日一生」と述べましたが、そのように自らの生を意義深く生きる必要があるのでしょうか。

三人称の死とは、他人の死のことですが、これとは違って、二人称の死とは、親しく交わった近い方の死、つまり親しい「あなたの死」です。本日、ご列席のご遺族の方々におかれましては、まさにその二人称の死を経験されたこととなります。その痛み、悲しみは計り知れないものでしょう。一方で、そうでない方々にとって、同志社のコミュニティに集う一人一人が、見知らぬ誰かの「三人称の死」ではなく、ここ同志社のなかでは、集う皆が「二人称の死」として、共にその方々を偲びたいとの思いでここで追悼式を行っています。

グリーフワーク

ところが、「二人称の死」とは言え、本当にその死を悲しむことができたか、ということ必ずしもそうでない場合があったかもしれません。あまりに悲しい耐え難い現実を直視できなかったことも含めて、感情表出というのはそう簡単ではありません。

グリーフワーク(grief work)という言葉があります。「悲嘆作業」とも訳されていますが、離別や死別に受ける悲しみ、嘆きから立ち直る過程も含めたプロセス全体を指します。その意味では、葬儀をしたり、告別をしたりすることもグリーフワークの一つだと思います。古代より古今東西、埋葬の習慣が人類にはあります。これは動物にはない習慣です。誰も動物が葬儀をして祈っている場面に遭遇したという人はいないでしょう。生物のなかでなぜ人間だけが葬儀をしたりするのでしょうか。それは意味のない単なる儀式だけなのでしょうか。いやそれだけではないようです。ここに人類の一つの知恵とでも言うべき遺産があるようです。なぜなら人は、葬儀を通じて、喪の悲しみ、つまりグリーフワークをしているからです。

それでは、なぜグリーフワークが必要なのでしょうか。文豪シェークスピア(Shakespeare, W.)は、悲しみについて文学作品マクベスのなかで以下のように述べています。「悲しみを声に立てなさい。口に出さない悲しみは、荷の勝ち過ぎた心臓にささやいて、それを破裂させます。」(『マクベス』四幕・三場、野上豊一郎訳)。このシェークスピアの言葉を借りれば、もしグリーフワークをしなければ、「荷の勝ち過ぎた心臓にささやいて、それを破裂させます」という悲劇があることを暗示しています。つまり、私たちは悲しみをため込むことが精神的に危険であることも示唆しているのでしょうか。

このことは、アメリカの精神科医リンデマン(Lindemann, E.)が臨床的データで示しました。それは 1942 年にココナッツ・グローブで起きた大火災(Coconut Grove fire)で 492 名の方々が亡くなった時のことです。この火災により近親者を亡くした人のうち、初期の頃に悲しみを表出した人とそうでない二つの類型がありました。半年後、1 年後に

追跡調査から分かったことですが、その二つのグループには顕著な違いがありました。(Lindemann, Erich (1944) “Symptomatology and Management of Acute Grief” *American Journal of Psychiatry* (American Psychiatric Association) 151 (2): 155-160.)

結論的に言えば、悲しみを素直にすぐに表出できた人たちのほうが、立ち直りが早かったのです。逆に、悲劇の際に気丈にふるまい悲しみを表明しなかった、我慢した人たちのほうが、結局、立ち直るのが難しく、時間が経って、半年、一年後に、ある人は精神症状が悪化し、うつ症状になる人が出るなどという調査結果を示したのです。リンデマンは、これらのことから、悲しみを抑圧せずに、グリーフワークがいかに大切であるのか、つまり、悲しみを表出することが残された人にとって大切であると結論づけました。

「涙そうそう」

私もかつて身近な大切な方を亡くした経験がありますが、それが大切な人であればあるほど、本当の意味でお別れする、あるいは悲しむということが無意識に避けていたように思います。そんなとき、たまたま「古いアルバムめぐり ありがとうってつぶやいた いつも いつも胸の中 励ましてくれる人よ・・・」というラジオから聞こえてきた森山良子さんの「涙そうそう」*という歌に、深く感銘したことを覚えています。(※「涙そうそう」とは沖縄弁で、涙がとめどなく溢れる様子を言う。)

この歌は森山さんが大切なお兄様を亡くされた時のことを後に回顧して作詞した歌ということですが、私自身、最初に聞いたとき直感的にそういう悲嘆の詩なのだと思いますが、まさに予想通りでした。「一番星に祈る それが私のくせになり 夕暮れに見上げる空 心いっぱいあなた探す」という独特の表現は、死別の悲嘆を体験した者でないとなかなか出てこない詩的表現のように思えました。まさにそれは森山さんの鎮魂歌であり、大切なお兄さんへの想いを抑圧することなく、涙溢れて思い出した「涙そうそう」は、典型的なグリーフワークなのでしょう。

Re-member

英語で“Remember”というと、「思い出す」というような意味ですが、語源的には、re という接頭語は「再び」という意味です。リ・ダイヤル、リ・ユニオンなどの接頭語の「リ」です。ということは、re + member の本来の意味、語源は「再びメンバーとする」ということになるかと思います。それが転じて、「思い出す」「覚える」と言う意味になったのでしょう。

私は社会福祉学を専門にしていますが、特に臨床的、実践的に自殺予防にかかわってきました。たとえば、自死遺族の会は、自死遺族の方々が誰にも言えなかった苦しみ、悲しみを同じ経験をした者たちと分かち合う会です。自死の場合、その遺族は多くの場合、誰にも言えなかったという苦しみ、悲しみに苛まれている場合がしばしばあります。また自死遺族の多くは、もしかしたら自分が助けられたのではないかという自責の感情も伴い、本当に辛い、悲しい、気持ちをずっと抱え込んだまま生きています。先ほどのシェークスピアの「悲しみを声に立てなさい。口に出さない悲しみは、荷の勝ち過ぎた心臓にささやいて、それを破裂させます」という言葉がリアルに想起されます。自死遺族の会では、遺族がこれまで誰にも言えなかった悲しみや苦しみを、共に分かち合うことで、その苦しみか

ら解放されることが多くあります。それはグリーフワークとなっているのだと思います。参加した遺族が互いに悲しみを分かち合うことで、そこには強い共同体意識も生まれていきます。

その際、悲しみを通して、押し殺してしまっていた悲嘆感情とともに、実は亡き人の大切な思い出までも隠ぺいしてしまっていたことに気づくのです。逆に、悲しみを誰かに打ち明け、それを解放してあげることによって、再び、その亡くなった方に正面から向き合い、そこに感謝の気持ちが生まれてくるのです。抑圧ではなく、思い出すのです。死んだことを受け入れられなかった気持ちにも向き合い、死の現実を認め、それを受け入れるのです。まさに再び、メンバーにする。つまり re-member となるのです。

「私を覚えてこれを行いなさい」

ところで、十字架にかかる前の晩に、主イエスは、弟子たちを集め、そこでユダヤ教の習慣としての過ぎ越しの祭りの食事を行いました。皆さん絵画などでご存じの最期の晩餐と言われているものです。これが今日の基督教の聖餐式となります。その際、イエスが命じた有名な言葉を知っておられる方もいると思います。それはこれから後に十字架にかかり死んでいき、もうその場になくなることを予期してイエスが語った「私を覚えてこれを行いなさい」(ルカ福音書 22 章 19 節)という言葉でした。英訳聖書(NIV)では“do this in remembrance of me”(Luke 22:19, NIV)となっています。つまり、私を覚えて、私を「再びメンバーとして」これ(聖餐式)を行いなさい、ということになります。イエスを再びメンバーとして覚えて聖餐式を教会は2000年間行ってきたことになります。

今日、ここに追悼式を行い、悲しみを抑圧することなく、大切なお一人お一人を再びメンバーとして迎え入れて感謝をもってこの場を迎えられることを祈ります。

復活の希望

聖書は、十字架にかかったイエスの復活をリアルに伝えるとともに、その復活に私たちもキリストによって ^{あずか} 与るのだ明確に伝えています。それは基督教信仰の根幹でもあります。十字架は明確な死を意味します。イエスは死ななかったということではありません。死んだふりをしたのでもありません。確かにイエスは死にました。「葬られた」という表現は死が確実であったことを示しています。

しかし聖書はイエスが三日目に復活したというのです。つまり復活はその死が終わりではなく、死の向こうにある命のよみがえりがあることを教えています。「わたしは復活であり、命である」(ヨハネ 11 章 25 節、新共同訳)とイエスは述べられましたが、私自身も、この最大の奇跡とミステリーをリアルに待ち望んでいます。これこそ真の希望だと思います。これは今生きている者、すでに永眠した者双方にとっての希望の源泉であるのだと思います。

つまり、死という最大の悲しみの向こうにも希望と喜びがあるということを教えています。それがいつなのか、どのようなものか定かではありません。故にそこには待ち望む信仰が求められます。「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。」(コリントの信徒への手紙二 4 章 18 節、新共同訳)とパウロが語った通りですし、「球根のなか

には」という讃美歌にあるように、「いのちの終わりは いのちの始め」であり、「その日、その時を ただ神が知る」ということです。

祈り

天地万物を創造された私たちの父なる神様、今日のこの追悼礼拝を祝福して下さり感謝します。

この追悼礼拝を通して私たちが「人皆の終りがある。命あるものよ、心せよ」という聖句にある通りに、「生涯の日を正しく数える」ことを学び、私たち一人一人が自らの死への自覚をもつ者としてください。

またこの日、愛する方々を亡くした方々、ご遺族へのあなたの天来の豊かな慰めがありますように心よりお祈りします。

私たちは、本日このクラークチャペルに追悼のために集まり、亡き大切な人を re-member しようとしています。亡くなった方々を「再び、メンバー」としつつ、今、生きている命に感謝しつつ、そしてまことの希望を持って生きることができますように。

そして、私たちが、主イエスの十字架と、そして今日、特に復活の希望に目を向ける者でありますように、心よりお祈りします。

私たちの救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。

アーメン